

特別企画

ヤナーチェク狂恋

～ヤナーチェクの  
人間と作品

# 音楽と楽譜のはざままで

## ～ヤナーチェクと即興の精神

内藤 晃 (ピアニスト)

レオシュ・ヤナーチェクの音楽の特質は、エモーショナルな直接性にある。発作的な爆発、不規則なリズム、短いモチーフの執拗な反復——それはあたかも即興のようで、我々の本能や感覚にじかに訴えかけてくる。

作曲家ヤナーチェクの出発点は、青年時代、ライプツィヒとウィーンへの留学を通じて、既存の音楽様式への違和感が芽生えたことだった。均整を重視した西欧の伝統的な作曲語法では、音楽が硬直し、感情の真実味が失われてしまう。モラヴィア人のヤナーチェクは、まず母国の民謡や舞踊に生きた感情を求め、あちこちに赴いて収集した。また、彼は人の話し言葉の抑揚にも生きた感情の発露を見出し、それを楽譜に書き留めて創作に活かした。彼の音楽にあらわれた感情のえもいわれぬ生々しさは、このような飽くなき探求の賜物であり、そこには紛れもなく、迫真の声の肉感が潜在している。

ピアニストである筆者は、1912年に作曲されたピアノ曲「霧の中で」に、ヤナーチェクのひとつの到達点を見出す。不遇をかこつていたヤナーチェクが、やり場のない閉塞感を鍵盤上に吐き出した音楽だ。第2曲のフェルマータを伴った休符。第4曲の悲哀漂うレクタタイヴォ風の下降旋律。——ヤナーチェクは、拍節や小節線の呪縛からすっかり解放たれている。メトロノームで規定できない流動的な時間の中で、ヤナーチェクの魂が慟哭する。

「霧の中で」第4曲より

譜例1 Allegro *rit.*



ヤナーチェクの  
自筆譜 (1912年)  
譜面としては非常に  
すっきりしていた。

譜例2 Presto ♩=160 *accel.* *Meno mosso*



初版 (1913年、  
Klub přátel umění)  
AllegroをPrestoに。  
*rit.*をMeno mosso  
に。*accel.*を加筆す  
るなど。

譜例3 Presto ♩=160 *sost.* *accel. molto* *Meno mosso*



第2版 (1924年、  
Hudební Matice)  
冒頭のフェルマータ  
を加筆。8分音符を  
16分音符に推移させ  
るなど。

脳裏に鳴り響く音楽を採譜する作曲家と、楽譜という記号の上で思考し音符を積み上げる作曲家がいるが、前者のヤナーチェクは、この流動的な時間を書きあらわすのに苦慮し、楽譜の改訂を重ねている。譜例1～譜例3はその痕跡(第4曲冒頭)であるが、筆者には、ヤナーチェクが、楽譜というメディアの限界に直面しているように感じられる。8分音符から16分音符に推移させて*accelerando*の程度を表したり、冒頭

のEsにフェルマータを加えたりなどといった改訂（譜例3）からは、限られた語彙の中で、数字で割り切れない音楽のタイミングを何とか表現しようとするもどかしさが伝わってくる。「霧の中で」の改訂は、ヤナーチェクという一人の作曲家が、「音楽」と「楽譜」の埋めがたい狭間で葛藤した痕跡なのだ。

キース・ジャレットは、自身の即興演奏による伝説的ライブ「ケルン・コンサート」の楽譜化を拒み続けた。渋々楽譜化を承諾したキースは、「私はメトロノームが刻む時間からまったく離れたところで演奏している。だから、ひとつひとつの音符は正しくても、その時間は正しくないという箇所が多く存在している」と序文に書いている。そして、「インプロヴィゼイションとしての真実の感覚を明るみに出すことは、依然として不可能だ」と言い切る。その楽譜は、美しい音楽が、無理矢理に小節線に封じ込められて萎縮してしまっているような居心地の悪さを発散している。

筆者は、このキース・ジャレットの楽譜に通ずる窮屈さをヤナーチェクの楽譜にも感じ取る。「霧の中で」の楽譜にあらわれたヤナーチェクの葛藤の痕跡は、即興演奏の採譜で生じるそれと同質のものだ。この音楽に底流する流動的な時間感覚は、そもそも楽譜というメディアの表現能力を超えており、拍節から離れた小節線はもはや便宜的なものでしかない。それでも作曲家



ヤナーチェクの自筆譜「思い出」(©内藤晃)

は、脳裏に鳴り響く音楽のデッサンを、たどたどしく紙に描き続ける。演奏家の想像力に淡い期待を抱きつつ。

ヤナーチェク晩年のピアノ曲「思い出」の自筆譜は、メモ帳のような小さな紙に、数小節ずつ豆粒のように走り書きされている（写真）。これを見ると、ヤナーチェクが本質的に即興の人であったことが即座に感得されるだろう。それは、実際に演奏してみたときの身体感覚によっても裏付けられる。鍵盤とのインティメートな一体感。響きの海に身を浸しながら次の響きを探ってゆくような感覚。ヤナーチェクはピアノの名手であった。

オペラに情熱を傾けたヤナーチェクにとって、最も近い楽器で綴られたピアノ曲は、合間に書きつけた日記のようなものだった。それはいわば自らの感情のはけ口であり、聴衆に聴かせることを想定した音楽ではない。そんなことに思いを馳せながら今一度ヤナーチェクの楽譜を

「ヤナーチェクピアノ作品集Ⅰ・Ⅱ」  
校訂・解説・連指・内藤 晃  
ヤマハミュージックメディアより  
好評発売中!

Ⅰ=ズデンカ変奏曲、3つのモラヴィア舞曲、草陰の小徑にてⅡ  
2,100円

Ⅱ=1905年10月1日街頭にて、霧の中で、思い出、ないしよのスケッチ  
1,680円



ヤナーチェクの使っていたピアノ（FRIEDRICH EHRBAR製）(記念館) (©内藤晃)

手にとってみると、そのぶつきらばうな記号の向こう側から、頑固で不器用なモラヴィア人の紡ぎ出す不思議な即興演奏が聴こえてくるような気がする。